

令和6年度入学 看護学部 一般選抜・後期 試験問題の出典

種別	大問 番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	上田 紀行	生きる意味	2005年 P132-137・204-209より一部改変	岩波書店

令和6年度 一般選抜・後期

看護学部

小論文 (90分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、4ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(150点)

いま私たちの社会に求められていること、それは「ひとりひとりが自分自身の「生きる意味」の創造者となる」ような社会作りである。

長い間、この日本社会で私たちは「他者の欲求」を生きさせられてきた。他の人が欲しいものをあなたも欲しがりなさい。そして「他者の目」を過剰に意識させられてきた。他の人が望むようなあなたになりなさい。しかし、そうやって自分自身の「生きる意味」を他者に譲り渡すことによって得られてきた、経済成長という利得は既に失われ、私たちは深刻な「生きる意味の病」に陥っている。

(中 略)

私たちの抱えている一番の問題、それは私たちが「生きる意味を生み出す自由」を獲得していないということだ。私たちの「生きる意味」は誰かから与えられる。そしてその「生きる意味」に向かってなるだけ効率的に生きなさいという社会。私がいようとしまいと、私の「生きる意味」は最初から決まっているように感じられてしまう社会。それは私たちの社会の意味のシステムと私たちひとりひとりの意識が重なり合って生まれている「生きる意味の病」なのである。

そこからの脱出は、私たちひとりひとりが自分自身の生きる意味を創造していける社会への変革である。〈生きる意味を創造するものとしての人間〉という人間像こそが、私たちを解放へと導くものなのである。

(中 略)

経済的に自立していても、「生きる意味」において自立していなければ、私たちはこの社会システムのドレイ⁽¹⁾となってしまう。学校の成績が良くても、本当に自分のやりたいことが分かっていなければ、私たちは単なる「いい子」だ。そこから本当に自分自身が「意味の創造者」となれるかどうか問われているのである。

(中 略)

かなり前から「これからはモノの時代ではなく、心の時代だ」と言われるようになった。そして新聞などの世論調査を見ても、「モノより心だ」という意識はケンチュ⁽²⁾ョに表れてきているし、私もその方向性には共感を覚える。しかし繰り返し「心の時代」が説かれているにもかかわらず、私たちがいっこうに豊かさを感じることはできないのは何故だろう。

それは「心の時代」の「心」が誰の心なのかという出発点に全く意識が払われていないからだ。「心の時代」の「心」が誰の心なのかと言われれば、それは「あなたの心」でしかありえない。「心の時代」とは私たちひとりひとりの心の満足が出発点になる時代のことなのだ。しかし、私たちの多くはこれまでのように「誰かが私たちの心を満足させてくれる方法を教えてくれるだろう」とか「心の時代の上手な生き方を示してくれるだろう」と思ってしまった。

(中 略)

「心の時代」とは、私の「心」「感じ方」を尊重しようという時代である。〈これが誰にとっても正しい「心の時代」の過ごし方だ〉などというものはない。自分自身の心に素直になって、私がいま一番何

を求めているのかに従って生きていこう、モノの多さ、地位の高さ、そして「他者の目」からの要求に感わされず、自分の感じ方を尊重して生きていこうということこそが「心の時代」なのだ。私たちにいま必要なのは、私たち自身の姿を、私たち自身の心を映す鏡なのである。

(中 略)

さて、「生きる意味の病」から出発して、私たちはようやく未来を展望できるところまで到達した。「人の目」と「効率性」によってがんじがらめになって、私たち自身の「生きる意味」が見失われているところに私たちの時代の病はある。それ故、いま私たちに求められているのは、私たちひとりひとりの「生きる意味」の自立である。しかし、一見私たちの自立をもたらすように見える、新自由主義的なグローバルイズムは私たちをますます効率性と他人からの評価に縛りつけ、私たちの「生きる意味の再構築」をもたらすものではない。

いまこそ、経済成長や数字に表される成長といった、私たちや私たちの社会を外から量的に見る見方だけではなく、「生きる意味の成長」といった人生の質に関わる成長を考えるべきときではないか。そうした「内的成長」をもたらす社会への転換が求められているのである。それは私たちが自分自身の「喜び」と「苦悩」に向かい合うことから始まる。そして、それは私たちの間のコミュニケーションのあり方の転換でもある。「内的成長」を育む様々なグループが生まれ、さらに仕事、学校、家庭といった場が私たちの「内的成長」の場へと転換していく。私たちのたどってきた道筋はおおよそ以上のようなものであった。

誰かから、あるいは社会から「生きる意味」を押しつけられるのではなく、私たちひとりひとりが「生きる意味」の創造者となる社会への転換がいまこそ必要だ。しかし、そうした転換に大きな危惧を持つ人もいることだろう。ひとりひとりが自分自身の「生きる意味」のもとに行動していたら、この社会はバラバラになってしまうのではないか。そもそもひとりひとりがやりたいように生きていけば、それは利己的な個人の集まりとなってしまう、社会の統合が取れなくなってしまう。

押しつけられた「生きる意味」ではなく、自分自身の人生を取り戻すこと、それはヨクアツ⁽³⁾された自分自身から「我がまま」に生きることへの転換である。しかし、それは自己中心的で周りを意に介さない「ワガママ」となる可能性を秘めている。この「我がまま—ワガママ」問題はこれからの時代の大きな問題になるだろう。

「我がまま」と「ワガママ」の違いとは何だろう。また、「我がまま」への目覚めがどのようなときに単なる「ワガママ」になってしまうのだろうか。^(A)

まず何が「ワガママ」と感じられるかは、社会によってかなり違うということを認識しておきたい。例えばアメリカに行くと、多くのアメリカ人のあまりの自己主張の激しさに閉口する人が多い。「私がこうしたい！」ということを使い張るのが当たり前で、言わなければ何も考えていないと見なされ、日本のように「口に出して言わなくても、何を考えているかを感じてくれる」社会がナツカシク⁽⁴⁾なる。このように私たちから見ればかなりの「ワガママ」を言っても、「ワガママ」とは見なされない社会もある。しかしそうした社会でも、明らかに「ワガママ」ならば、強い調子で否定され拒否されるわけで、やはりそこには「我がまま」と「ワガママ」の差は存在しているわけだ。

そうした文化の差、社会の差を考慮に入れつつ考えたいが、この〈ワガママ〉を嫌う日本社会でもこのところ〈ワガママ〉としか思えない振る舞いが増えてきているのも事実だ。電車の中での大声での携帯電話の使用はこのごろ若者よりも大人のほうを多く目にするようになった。商品へのクレームもあるところまでは消費者の当然の権利だし、製造者の改善のためにもなるが、偏執的なクレマーとなると話は別だ。子どものことで一方的に教師を責め立てる親。幼稚園や小学校の運動会は、自分の子ども「だけ」をビデオに収めたい親の場所取り合戦になり、お互いに「お前が邪魔なんだよ」と怒号が飛ぶ。そしてインターネットの掲示板などで炸裂するボウジャクブジンで攻撃的な発言など。どうしたらこんなに自己中心的に振る舞えるのかといふかってしまうような場面に遭遇することが少なくない。

そうした状況でいつも感じるのは、「人の目」を気にしてきた日本人がいったん「人の目」を気にしなくなると、そこには自分自身の行動を律する何ものも存在していないのだろうかということだ。

(中 略)

数年前、私の教えている東工大で留学生向けの講義を受け持ったとき、「日本の大学のどこに一番違和感を感じたか？」と聞いたことがある。その答えにびっくりした。ひとりが「学生が授業中寝ていることです」と答えたところ、皆が「そうだ、そうだ」と大きくうなずいたのである。「どうして大学生が教室で寝ているんですか？ それでも大学生ですか！」と言うのだ。

それを日本人大学生にぶつけてみると誰もが「だって、誰にも迷惑かけていないんだから、寝ようが勝手じゃないですか」と言う。「寝ていて、授業についていけなくて後で困るのは自分なんですから、別に他人に何か言われる筋合いじゃないでしょう」。しかし、海外からの留学生にとってショックなのは、「大学生にもなって教室で寝ているあなたには、大学生としてのプライドがないのか？」ということなのだ。寝ていたら先生から怒られ、成績が下がるならば寝ない。友達から非難され、最低人間だと思われるのなら寝ない。しかしそうした「人の目」がなくなれば、寝てしまう。しかし、「人の目」がなくなっても、「自分の目」から見て教室で寝ることは大学生として恥ずかしいことだと思わないかと留学生たちは問うているのだ。

前述したように、ルース・ベネディクトは、「人の目」から非難される「恥」を強く意識する日本文化を「恥の文化」と呼んだ。しかし、彼女はもうひとつの「恥」を見落としていた。それは「私としたことがこんなことをしてしまうとは！」という、「自らを恥じる」という恥である。誰からも見られていなくても、恥じる。あるいは、「こんなことをしてしまって、ご先祖さまに申し訳ない」「亡き恩師の期待を裏切ってしまった」と、既に生きていない人に対して恥じる。日本人の倫理観は、単に自分の周囲の「人の目」だけではなく、先人たちや恩師たち、そして自分自身に対して恥ずかしいという感覚にも支えられていたのである。

しかし、そうした恥の感覚が薄れ、ベネディクトの言うように「人の目」のみを気にするように「恥の文化」が縮小してしまい、それ故「人の目」が気にならなくなれば何でもやってしまうというのが現在の日本人の姿なのではないか。そして、そこには決定的に欠けているものがある。それは自分自身に対する「自尊感情」だ。

自分自身に対する自尊感情がある人間ならば、「人の目」がないところでも、何でもやり放題ということにはならない。自尊感情とは自己信頼と言い換えてもいい。自分自身が尊い存在であるということを知っている人。尊重されるに足る存在だと感じている人。自己を信頼し、自尊心のある人は、「私としたことが、恥ずかしい」ということはあまりしないし、してしまったにしても反省する。しかし、自尊感情が低く「自分なんかどうせたいしたことないんだよ」と思っている人は、人の目がなくなってしまうとどんなことでもできてしまう。自分という存在が、〈ワガママ〉な行動を律する歯止めにならないのだ。

(上田紀行『生きる意味』、岩波書店、2005年、pp 132-137・204-209より、一部改変)

問 1 下線部(1)~(5)を漢字で書きなさい。なお、送り仮名が必要なものは送り仮名まで正しく書くこと。

問 2 二重下線(A)について、作者はどのように考えているか、90字以内で述べなさい。

問 3 本文の内容を踏まえて、「ひとりひとりが自分自身の「生きる意味」の創造者となる」社会作りのために、作者は自尊感情をもつことの必要性をどのように説明しているかを述べた上で、文化の差や社会の差を考慮し、「自尊感情」を高めるためにはどのようにしたらよいか、あなたの考えを800字以内で述べなさい。